

令和8年度協働パイロット事業新規事業一次審査 会議録

開催日時 令和8年5月15日（金）午後1時30分から午後4時30分まで

出席者 委員 川村 美智、弓削 幸恵、千野 和子、石川 賀久
事務局 渡井 亮祐、前川 里奈、今西 真紀

会議内容

1 開会 <事務局>

2 委嘱状交付

3 市民自治推進課長挨拶 <石川 賀久>

4 委員紹介

5 委員長・副委員長選任

委員による互選の結果、川村委員が委員長に選任された。

委員長である川村委員の指名により、弓削委員が副委員長に選任された。

6 議事・審査

(1) 新規提案事業に関する事業概要説明等

提案事業（新規提案5事業及び継続提案2事業）について、事務局から事業概要等の説明を行った。

(2) 新規提案事業に関する審査

ア 外国にルーツのある就学前幼児とその保護者のための日本語教室 【えがお】

(千野委員)

日本語教育はボランティアに依存してしまっているというところが大きな問題であると感じているが、この事業においては人件費が計上されていない。人件費を計上するべきなのでは。

(弓削委員)

団体の活動を見ると、既に有度地域で3歳～6歳を対象に日本語教室をやっているようであったが、既存の事業と今回パイロット事業で実施する事業の違いはどこなのかが分からない。

(事務局)

既存の日本語教室を発展させる取組として位置付けている。団体単独では参加者の募集や周知に限界があることから、市と協働することで、行政のネットワークを活用した対象者へのアプローチを行い、事業の拡充を図りたいとの思いがある。

(川村委員)

静岡市内でも、外国にルーツを持つ子どもが多い地域では、日本語が分からないことで学校生活になじめず、疎外感を抱くケースがあると聞いている。一方で、就学前に日本語の基礎を身に付けることができれば、小学校生活へスムーズに入っていけるという話もあったので、活動としての必要性は感じられる。

(千野委員)

日本語教室は、マンツーマンで行われることが多く、個人の活動になりやすい面がある。しかし、個々の活動には限界があることから、今回、関係者のネットワーク化や市と協働して支援体制を構築していこうという点は、必要性の高い取組であると思う。

(石川委員)

必要な事業だと思うので、人件費はしっかり積んでおいたほうが良いと感じた。静岡には多国籍の方が多いと思うが、教室の中では様々な言語に対応できるのか。

(事務局)

多様な言語への対応は難しいことから、日本語と英語を基本とし、ジェスチャーを交えながら分かりやすくコミュニケーションを図る等、日本語に慣れてもらうことを意識して支援を行うとの説明があった。

(弓削委員)

地域を有度限定しているが、有度地域でのニーズはどれくらいあるのかが気になる。

イ 災害時における要配慮者の適切な避難生活環境確保と災害関連死防止対策

【特定非営利活動法人 静岡市障害者協会】

(千野委員)

避難行動要支援者名簿が活用されていないことは、以前からよく言われてる課題であり、事業の必要性を感じる。一方で、その課題に対して具体的にどうするのかという部分についてやや弱いのではないかなと思う。

(弓削委員)

講師謝金がかかなり計上されているが、いつ、どこで、何のためなのかが分かりにくい。

(川村委員)

課題としては、少し具体性にかけるところがあるような印象。もう少し絞ったら

どうかと思う。

(千野委員)

企画提案書だけだと何をするのかよくわからないので、もう少し話を聞きたい。

(川村委員)

進行の具体的なプランや成果をどこに置くかがもう少し明確に分ければ良いなと思う。一方、支援を必要とする人の状況は年々変化するため、避難支援が難しい課題である。今年作成した支援体制なども、翌年にそのまま活用できるとは限らないということもある。

(石川委員)

団体が担う役割よりも、市に担ってほしい役割のほうが多い印象。事業の必要性はわかるものの、もう少し役割分担の調整をしたほうが良いのでは。

ウ しずおかゲームクリエイターEXPOプロジェクト

【ShizuokaGame-Based Learning Lab】

(川村委員)

対象は誰なのか。

(事務局)

メインは小学校5, 6年生を考えていると聞いている。

(弓削委員)

いつ、どこで、どれくらいやるのか、がわからない。事業にはパソコンがいるが、その辺りはどのように考えているのか。

(事務局)

パソコン自体は団体が持ち込むように考えているとのこと。

(川村委員)

最終的に作品を制作することが目的であると思うが、完成した作品をどのように活用するのかまで考えられていると良いと感じた。作品を制作・発表して終わりではなく、出来上がったものを学校で活用したり、静岡市歴史博物館での展示の説明に活用したりするなど、完成後の活用方法を含めた発展性があるといい。

(千野委員)

事業は無料で実施し、定員も40名程度としているが、応募者数が定員を上回った場合はどのような方法で参加者を決定するのだろうか。

(弓削委員)

静岡市の地域資源を題材とした探求学習プログラムを実施し、参加者は対象となる建造物や地域の歴史について調査を行うとのことだが、ワークショップ2回で実施できる内容なのか。企画提案書に記載された内容と、実際のプログラムとの整合性があるのかが気になった。一方で、静岡の地域資源を活用し、マインクラフ

トでまちづくりをするという着眼点は子どもたちの興味を引きやすく、静岡市の魅力発信にもつながる取組として期待できる。

(川村委員)

ゲームを作成するにあたっては、デジタル上での体験だけでなく、実際に地域を歩いて、素材となる建築物や地域資源を見て学ぶことも重要である。現地での体験を取り入れることで、より深い学びに繋がると思う。

エ 誰一人取り残されない地域への一歩に庵原ユニバーサルスポーツモデル創出事業
【特定非営利活動法人 結楽】

(千野委員)

提案団体は設立して間もないと思うが、提案されている規模の事業を実施できる体制が整っているか、やや不安を感じた。

(事務局)

昨年度、清水区の小学校の総合の時間で、パラスポーツを考える授業を実施したという実績があるので、今回はそれらを活かして実施していきたいという思いがある。

(千野委員)

積算では、ニュースポーツの開発費用で30万円が計上されているが、具体的に何をするのか。

(弓削委員)

既存のスポーツを普及するのではなく全く新しいスポーツを開発するということが、そのために必要な経費や開発のプロセスについて、どのようなイメージをもっているのか知りたい。

ワークショップを複数回実施する計画であるにもかかわらず、参加人数が30人という設定はやや少ない印象を受けた。

また、モデル校となる小学校への協力依頼は、学校の年間計画との調整が必要であり、この時期から学校にお願いすることは難しいと感じる。

(石川委員)

課題テーマでは「庵原地区」における取組としている一方、提案内容では興津地区を中心とした活動となっている。団体の活動拠点が興津地区であることは理解できるが、庵原地区を対象とする趣旨との整合性はどうなのか。

(川村委員)

提案書では「ユニバーサルスポーツ聖地を象徴する新たなユニバーサルスポーツの開発を地域住民と地域の子どもたちと協働で実施する」と大きな目標が書かれているが、静岡市はユニバーサルスポーツの聖地なのか。

(事務局)

スポーツ振興課では、今後、庵原地区をユニバーサルスポーツの聖地にしていくことを目指しており、そのためにきっかけづくりもしていきたいという考え。

(弓削委員)

そうだとすれば、新たなスポーツを開発するよりも、既存のユニバーサルスポーツを活用・発信するほうが効果的だと思う。また、このプログラムで新たなスポーツモデルが開発できるのかが分らず、実現性に欠けると感じた。

オ 男性特有の生きづらさの解消 男性の生きづらさを解消する地域共創プロジェクト～男性が輝く体験型コミュニティ拠点の創出 おまちのキッチン LAB&アート コミュニティー～ 【ライフデザインインフィニティ】

(川村委員)

男性が地域とのつながりを持ちにくいという課題は理解できるが、そのような方が料理やアートを目的に参加してくれるかについては疑問がある。対象者の特性を踏まえ、より参加しやすいアプローチ方法を検討する必要があると感じた。

(千野委員)

対象者を 20 代から 50 代としているが、年代によって抱える課題やニーズは異なると考えられる。この幅広い年代に対して、同じアプローチをすることが適切なのか気になった。

(弓削委員)

この事業内容に手を挙げる人は、生きづらさを感じている人ではないような気がする。

(川村委員)

話しながら共同で作業すること自体が楽しいと思えない人がいるかもしれない。

また、生きづらさの捉え方は様々であるので、対象者の捉え方や年代の設定について組み立てを考えてみてほしい。

(3) 審査委員会

ア 審査に関する説明<事務局>

イ 審査

(1)～(2)の議事を受け、以下の団体を一次審査選定団体として審査会にて了承された。

- ・ えがお
- ・ 特定非営利法人静岡市障害者協会
- ・ ShizuokaGame-Based Learning Lab
- ・ 特定非営利活動法人結楽

(4) 継続提案事業に関する審査

ア きみの居場所プロジェクト【静岡の未来を拓く会】

(弓削委員)

放課後子ども教室で実施するということは、学校に来ていない子どもへのアプローチはできてないということ。当初は、学校生活に不安を抱える子どもたちが高校生と出会える場を創出するということであったが、当初の目的とすり替わってしまった印象が強い。

(千野委員)

不安のある子どもへのアプローチというのは具体的に何かされたのだろうか。

(弓削委員)

予算が増額されている一方で、「探求の学校未来図」の具体的な内容や、交通費 16 万円を計上している点についても、何のために必要なのか、事業内容との関連が分からない。当初想定していた不登校の子どもへの支援や新たな仕組みづくりに必要な経費であれば予算増は理解できるが、当初の目的とは異なる取組を行うために予算を増額することについては、妥当性を確認する必要がある。

(川村委員)

前年度は、高校生の発案をきっかけとして、その思いを実現していくという事業の背景や目的が明確であったが、今回の内容では、そのような取組の狙いや経緯が十分に見えてこない。事業の企画・運営に関わる子どもたち自身も経験を通じて成長できるような仕組みづくりができてるといいなと感じる。

(千野委員)

放課後子ども教室と一緒に出向く高校を広げていくような話もあったと思うが、今回の提案では広がり感があまり感じられない。

(石川委員)

違う事業が始まったような感じがある。昨年からの継続事業としての提案で、今回の内容が出てくることに少し違和感がある。

(弓削委員)

前年度の取組と今回提案されているプログラムとの関連性が見えにくく、今回の事業に至った意図が分かりにくい。

(千野委員)

団体が実施したい取組を提案しているように見受けられ、行政と団体が協働して課題を解決していくように感じられない。

また、市の委託事業に依存した取組となっており、予算が確保できなくなった場合に継続できない仕組みになっているのではないかと。事業終了後も継続していくためには、団体が主体的に運営できる仕組みづくりが必要である。

(弓削委員)

事業終了後の自走や継続のイメージが見えにくい。関わった高校生が事業終了後もどのように関わり続けるのかがわからない。

(川村委員)

審査委員会としては、今回の提案について、協働事業の観点から見ると、事業の方向性が協働パイロット事業の趣旨から少しずれてしまっていた点、協働パイロット事業として実施するのであれば、協働によって取り組む内容にもう少し焦点を絞って提案をしていただきたかった点を踏まえて、継続事業としては不採択とする。

イ 「対話の可視化」による日常の安心醸成と、社会参画への動線構築事業 ～アーカイブと DX でつなぐ「一人の時間」と「社会との接点」～【つながりあいず】

(弓削委員)

今回、新たに「アーカイブ」や「DX」といった要素が出てきたが、前年度の申請時点ではそのような方向性は示されておらず、突然追加された印象がある。解決すべき社会課題に合致した事業だとは考えにくい。

また、システムを構築するだけで、そのシステムを通じて参加者同士がつながり合う姿がイメージしにくい。

(川村委員)

初年度の評価として、事業に関わった人数は限定的であり、課題解決への貢献についても局所的なものにとどまったと考える。また、次年度の計画についても具体性がやや薄いと感じる。

また、少しでも社会とのつながりを持ちにくい人と繋がり合おうという趣旨である点は理解できるが、提案内容は対象を限定するような印象があり、より多くの人へ広がっていく展開が見えにくい。

(弓削委員)

前年度の参加者を中心とした内容となっており、新たな参加者が加わる仕組みが見えにくい。閉鎖的なコミュニティとなり、関係が固定化される懸念がある。前年度は、もう少し対面で交流する機会があったように感じる。

(川村委員)

当初は安心して語り合える居場所づくりが事業のコンセプトであったと思うが、今回の提案ではその視点が薄れている気がする。

(事務局)

団体は、氷河期世代など社会とのつながりを持ちにくい人に対し、心理的安全性を確保した場を提供しながら、次のステップにつなげる支援を行っている団体である。

そのため、参加者が安心して過ごせる環境づくりを重視しており、新たな参加者を積極的に受け入れて事業を拡大することとの両立が難しい面がある。今回、広がり

欠ける印象を受けるのは事業内容そのものというより、団体の支援方針や考え方が反映された結果なのかなと感じる。

(川村委員)

団体が大事にしている考え方については理解できるものの、安全性の確保を重視する事業内容では、事業の広がりや発展につながりにくいと考える。協働パイロット事業としては、市との協働による波及効果や発展性が期待されることから、団体の目指す方向性と協働パイロット事業の趣旨とは一致しないと判断し、継続事業としては不採択とする。

7 事務連絡

8 閉会

以上、この会議録が正確であることを証します

署名人

川村美智